

具体的な対応策を考える、より実践的な授業への挑戦

附属教育実践総合センター・太田佳光

1、本年度の授業のねらい

教育実習終了後の選択授業であるため、これまでも本授業には、意欲の高い受講生が集まる傾向があった。その期待に答えるために、より実践的な授業（教育現場に出て役立つ内容）を展開すべく、本年度は授業内容を大幅に見直すこととした。その基本的な考え方は、①一方的な講義を出来るだけ少なくし、自らが悩み考える演習的な時間を多くとること。②グループ活動を中心に具体的な対応策を考えること、である。

これまでも指摘したように、知識としての教職教養は、現場で役立つ事が多いと言われている。その一つの要因は、与えられた内容を本当に自分のものとしていない事が考えられる。学生たちは、とすれば、絶対の正解を求め、いわばマニュアル化した指導法などに傾きがちである。そのため、本授業では、これまでも学生がさまざまな教育実践上の課題を主体的にとらえ、その対応策を、教師になった自分自身の問題として考えることや具体的な対応策を取れる事を主としてきた。逸脱やいじめなどの問題を実際の事例を中心に提示し、その対応について具体的に考察することとし、あえて、絶対的な正解を示すことをせず、自分の考え方を確立することを、最も重要なねらいとしてきた。そうすることによって、より実態に応じた実践的な対応が可能になると考えたからである。（ただし、それぞれの事例に対して、必要な最低限の対応策は提示している。）

本年度は、その考え方をさらに進め、より学生の主体的な授業展開を目指そうとした。具体的には、実際の対応策の策定や、対応プログラムの一環としての模擬授業の実施である。（本年度の授業展開には、教職実践演習の授業経験が大変役に立った。）なお、本年度の受講生数は、33名であった。また、本学部のディプロマ・ポリシーとの関連では、「教育をめぐるさまざまな現代的課題について論じ、適切な対応を考えることができる。」に、主として関わる。（ただし、学生による授業評価からは、他の領域への貢献も多く認められた。）

授業概要は以下の通りであるが、シラバスに掲載した内容に、実際の授業においては、大幅な変更を加えた。それは、授業の実際で述べるように、一つの課題を徹底的に考え、丁寧に議論することにより、自分のものとする事を目指したからである。本年度課題とした事例は、逸脱に関する事例一例といじめに関する事例一例である。

- ①教育問題の現状と課題
- ②授業妨害と逸脱（1）ある事例の検討
- ③授業妨害と逸脱（2）対応策の検討
- ④逸脱行動と立ち直り（1）ある事例の検討から
- ⑤逸脱行動と立ち直り（2）対応策の検討
- ⑥逸脱行動の現状と課題：教師の役割と逸脱論
- ⑦第1回から第6回までの補足説明（授業の進み方により、第6回の内容が入ることもあるため）
- ⑧いじめ問題と教師（1）ある事例の検討から
- ⑨いじめ問題と教師（2）対応策の検討
- ⑩いじめ問題と学級集団（1）ある事例の検討
- ⑪いじめ問題と学級集団（2）対応策の検討
- ⑫いじめと学級づくり（1）いじめが起きない学級づくりとは
- ⑬いじめと学級づくり（2）集団を意識した学級づくり
- ⑭いじめと学級づくり（3）：人間関係を意識した学級づくり
- ⑮総括的討論

2、本年度の授業の実際

まず、先に述べた授業ねらいの説明の後、グループ分けを行った。本年度は、1グループ5～6名の6グループで授業を展開することとなった。グループ分けの後、エンカウンターの手法を用いた自己紹介とグループの名前決めを行った。このような導入をする背景は、今後の話し合い活動をより活発なものとするための布石である。ちなみに、決まったグループ名は、「フナッシー」「イリオモテノラネコ」「ミーヤキャッツ」「アルパカピバラ」「チームハムちゃんず」「ブタゴリラ」である。グループ名を決めるプロセスの中に、学生同士の相

互交流が生まれ、自分たちのグループ名を決めることによって、メンバーに対する愛着も生まれることが多い。本授業は、グループによる話し合い活動が中心となるため、グループメンバー相互の関係性の構築に配慮したものとなっている。

授業の最初の事例は、女子中学生の逸脱行動への対応を考えるものである。本事例は、授業者が実際に公立中学校でのフィールドワークを中心とした研究を展開したものである。そのため、現実の教師たちの対応を把握しており、より実践的な授業を展開するための素材として採用した。

まず、問題行動の実際を資料により提示し、その対応として、担任教師を中心とした対応策をグループごとに考えさせ、プレゼンテーションの形で発表できるようにした。発表にあたっては、各グループへの評価表を用意し、それぞれの発表への評価と、ブラッシュアップを行わせた。その後、質疑応答や討論としたが、学生たちは討論に対して、他者への過剰な配慮や自説にこだわるあまり攻撃的・感情的になる場合があるため、より良い方法へと議論を進めるブラッシュアップの視点を導入した。

以上の授業展開の後、実際に行われた対応について説明し、その理論的背景をボンド理論やラベリング論を中心とした逸脱理論によって意味づけた。

第二事例は、教職実践演習において使用したLINEがからんだ「いじめ事例」を取り上げた。第一事例と同様に、全体の対応策を考えて討論を行った後、その具体的な対応として、模擬授業をグループごとに実施し、評価とブラッシュアップを行った。その後、いじめ問題に対する基本的な考え方を、社会学の視点（いじめの生起は、人間集団が持っている特徴・メカニズムにより生じることが多いなど）から行い、まとめとした。

なお、例年取り組んでいる授業の工夫として、「大福帳」というA4版の出席カードを使用している。「大福帳」には、15回分のコメント記入欄が設けられ、毎回授業終了後に、授業への感想や質問などを学生が記入し、次回授業時に学生に返却するものである。この出席カードの使用により、授業時に学生がどのようなことを考えているかを知ることができ、次回の授業にその内容を生かすことが可能となる。また、学生の質問などに個別に対応できるため、より細やかな指導が可能となると言えよう。事実、本年度は、「大福帳」に自分の悩みを書いてきた学生があり、その対応を個別に行った。

3、授業評価の概要と今後の課題

授業終了前に行った「ディプロマ・ポリシーによる授業評価」の結果は、以下の通りである。本授業のねらいであるDP2「教育をめぐるさまざまな現代的課題について論じ、適切な対応を考えることができる。」に対しては、「十分貢献した」と回答した学生が、76%おり「貢献した」を合わせると94%の学生がそうであると回答した。その他、DP1, DP3, DP4, DP5に対しても、「十分貢献した」、「貢献した」を合わせると、それぞれ90%近い回答を得ることが出来た。この結果、本授業は、教育学部のDPの実現に対して高い貢献をなしていることが明らかとなったと言えるのではないだろうか。

さらに、授業終了時に、学生に対して本授業への感想を「大福帳」に記載してもらった。以下、学生たちの、感想をいくつか示したい。

「自発的に考える話し合いや模擬授業の時間が多く、様々な人の意見が聞けてコミュニケーション力を培うことが出来たのではないと思う。また、学ぶ点も厳選されていて、今何を学んでいるかがわかりやすかった。」

「先生の授業では、毎回の課題から考えることばかりで、とても難しかったです。とても楽しかったです。この授業で感じたことは、やはり私は教師になりたい、教師という仕事は素敵だなということです。私も子どもとまっすぐ向き合えるように、しっかりと生きて生きたいと思います。」

以上の通り、学生たちからは、高い授業評価を受けることができた。また、なによりも、主体的な学びが出来たこと、そのことに意義を見出してくれた学生が多くいた事に、授業者として強い喜びを感じた。本講義を一つの契機として、実践場面での対応に関する意識をより高め、現場実践に生かしてほしいと願う。

今後の課題として、どうしても理論的な背景の説明など、講義形式の時間になると学生たちのモチベーションが下がる傾向があった。学生相互で学び合わせたり、学生に教師役をさせたりと、色々と工夫をこらしたが、難しい課題となった。そこで、最近注目されている「反転授業」の形式を次年度より取り入れたいと考えている。事前学習の形で、理論的な部分を学習させ、本講義では、演習形式の授業を展開することにより、上記の課題を解消しようと考えている。さらに、対応策を考える授業形態のため、現場教師のスーパーバイズを取り入れる方向性なども模索していきたい。